仮面ライダーディケイド -a variaty world- 第二章 「十・年・共・演」

そらとび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド　－ａ　ｖａｒｉａｔｙ　ｗｏｒｌｄ－

第二章　「十・年・共・演」

【Ｎコード】

Ｎ２７３４Ｙ

【作者名】

そらとび

【あらすじ】

通りすがりの仮面ライダー、ディケイドこと門矢士。今回訪れるのは「仮面ライダーフォーゼ」の世界。すべてが型破りな宇宙ライダーと出会い、その瞳は何を見る――？

第一話「十・年・共・演」（1）（前書き）

どうも、そらとびです。皆さんお久しぶりです。
仮面ライダーディケイド小説、やっとこさ再開です。久々すぎて誤字の修正とか大変でした（^ー^；
今回は「フォーゼ」編です。フォーゼのない日曜日が寂しくて書きはじめてしまいました（笑）
ディケイドとフォーゼ、記念ライダー同士の共演です。拙い文章ですが、ぜひお楽しみくださいませ。
最後にひとつ。前回のフレプリ編では一回一回前書きや後書きを書かせてもらってましたが、今回から前書きはこの1回のみ、後書きも最終話の最後の1回のみにしたいと思います。余った前書きのスペースで「前回までのあらすじ」を、後書きのスペースで「次回予告」を書きたいと思います。ディケイド本編に少しでも近づけたいと思いますのでw

読み終わった後、感想など頂けるととても嬉しいです。
それではごゆっくりどうぞ！

第一話「十・年・共・演」（1）

「ふぅ……」

深呼吸。

そして、階段をゆっくりと上り始める。それほど長い階段ではない。

だが、出来ることなら永遠に続いて欲しいとさえ思う。

これから行く所は、正直言ってあまり気乗りしない。いやむしろ、行かなくていいなら行きたくない。

だが、行かなければ何も始まらないのだ。だから、行くしかない。

階段を上りきり廊下をしばらく歩くと、目指していた場所へとたどり着いた。

扉を開け部屋の中に入ると、一斉に注目を浴びる。それまで喋っていた奴らが一気に静まり返り、雰囲気ががらりと一変した。

最初はこんなもの…なのだろうが、そうわかっていても少し緊張する。

多くの視線を感じているまま、俺はその視線達と対面した。

教卓に出席簿を置き、自己紹介をすることにする。

だいたいわかっただろうか。

そう。俺一門矢士は、

「…今日から、このクラスの臨時講師をすることになった、門矢士……です（ニッコリ）」

高校教師になっていた。

写真館でのこと。

「これは…ロケットですか？」

光夏海ー夏みかんが言った通り、スクリーンには宇宙空間をバックに月面基地が描かれており、右下にはロケットのようなマークも描かれている。

描かれているのだが…そのロケットには、大きな複眼、真っ直ぐ伸びた触覚があった。

まるでーそうか、もしかして、この世界のライダーと何か関係があるのかもしれない。

「それよりも、この月面基地…お宝の匂いがするね」

「お前…ホントお宝好きだな」

「褒めても何も出ないよ、士？」

海東ー海東大樹が嬉しそうに笑った。別に褒めてねぇよ。

「とにかく、宇宙に関係ありそうな所に行ってみればいいってことじゃないかな？　今回の士の服装からすると…なんかすごい大きな会社とか？」

「そうだな」

ユウスケー小野寺ユウスケの言った通り、俺は黒い新品のスーツを着ていて、左手には鞄を提げていた。自分で言うのもアレだが、まるで新人社員である。

「それにしてもユウスケ、よくわかってるじゃねーか。海東とはえらい違いだ」

「ん？　また褒めてくれたのかい、士？」
「だから違うって」
海東にはユウスケを是非とも見習ってほしいところだ。
「鞄の中には何が入っているんだい？」
「…そういえば、まだ開けてなかったな」
…海東に言われるまで気付かなかった。
「ふふん♪」
「どや顔をやめろ」
そう言いつつ鞄を開けると、一つの大きな封筒が目を引いた。
ユウスケが封筒から一枚の書類を取り出す。
「差出人は…”天ノ川学園高等学校”…？」
…なんだって？
「なになに…『この度は臨時講師の件、承ってくださり誠にありがとうございます。教職員一同、門矢先生を心よりお待ちしております』だって」
「こ、高校の先生……」
なんてこった…。
俺は人に物事を教えるのが得意じゃない。今まで何でもそつなくこなしてきたが、これだけはどうも苦手だった。
「頑張ってくださいね、門矢先生っ」

「先生って呼ぶな」

なんだろう、すごく気が重い。
重いが、とにかくやってみるしかなさそうだな……。

そんなわけで俺は今、教壇に立っているのである。
指定されていた時間より早く出勤した俺は、大杉とかいう面白い格好の先生に、

「あのですね門矢先生。先輩として僕から言っておくこととしてはですね、教師の第一印象は”笑顔”が一番大事なんですよはい。これはね間違いない。いやマジで」

としつこく言われ（本当にしつこかった）、教師とはどういうものなのか知らない俺はひとまず、その忠告を聞いておくことにした。
俺は作り笑いが苦手なのだが、どうやらクラスの面々には悪い印象には映らなかったらしい。
とりあえず、ホッとした。

「えー、それじゃまず出席を取っていきますが……ん？　歌星と如月はどうした？」
「はいっ先生、賢吾くんと弦ちゃんは保健室ですっ」
「そうか。ありがとう」

答えてくれたのは城島ユウキという女子生徒だ。
歌星賢吾と如月弦太朗―この２人のことについても大杉が話していた。

「門矢先生門矢先生、２Ｂの生徒のなかでも、特に歌星賢吾と如月

弦太朗には気をつけといた方がいいですよ。あいつらよく保健室だの何だのって言って授業をサボるんですよ！　全く何考えてんだあいつらは！」
「さあ……俺ちょっと授業の準備しなきゃ」
話が長くなりそうだったので適当にごまかしたが…ちょっと気になるな。

「…よし、臨時講師なので短い間ですが、これからよろしくお願いします！（ニッコリ）」
「イエーイ！」
「門矢先生よろしくー！」
クラスの皆がわっと盛り上がる。どうやら、俺のことを受け入れてくれたようだ。
最初はどうかと思っていたが…案外うまくやっていけそうだ。
早く皆の顔と名前を覚えなきゃな。

お昼時の食堂ほど忙しいものはない。
「日替わり定食、２つ入りましたー」
「カレーライスの方、おまちどおさまでした。熱いので気をつけてくださいね」
お腹を空かせた生徒たちが、次々にテーブルを埋めていく。それを横目に、フライパンの火の加減を調整していく。
申し遅れたが、私の名前は鳴滝。世界の破壊者ディケイド一門矢士がこの世界に来たのを追い、この学園にいることを突き止め、食堂のお兄さ…おじさんとして潜入しているのだ。

…ん？　私に料理が出来るのかって？　私にだって人並みの料理くらい作れるさ。
さて、私がここに潜入しているのは、ディケイドにこの学園の秘密を知られる前に追い出すための作戦を実行する場所として、最も相応しい場所だと判断したからだ。
ここは教師も利用することの出来る食堂で、ほとんどの教師がここで昼食をとっている。この学園に来たばかりのディケイドは当然、他の教師の真似をしてここへ来るはずである。
そして奴の頼んだ食事に毒薬を入れ、それを食べて気を失ったところで時間を止め、どこか別の世界に放り出すのだ。
いつもより少し回りくどいかもしれないが、今回はディケイドに先を越されてしまったのでこのような作戦になってしまったのだ。この学園には生徒や教師、大勢の人々がいる。正体をばらさないためにはこの方法が一番準備しやすく確実である。
もういつでも作戦を決行する準備は整っている。あとはディケイド、お前が来るのを待つだけ……。

俺一門矢士は午前中の授業を終えると、夏みかんの作ってくれた弁当を片手に保健室に向かっていた。一応、歌星と如月に顔を見せに行かないとな。
しばらくすると、保健室に着いた。

「失礼します（ニッコリ）」
「門矢先生。どうかされましたか？」
「あの、うちのクラスの…2年B組の歌星と如月がここにいるって聞いたもので」
「歌星くんと如月くん？　今日は2人とも、ここには来てませんけど」
「なんだと……！？」

「門矢先生？　いきなりどうしたんですか？」
「…いや、あの、ありがとうございました。失礼します！」
驚きのあまり、一瞬素に戻ってしまった…。
「2人ともいないって、どういうことだ！」

「食べに来ないって、どういうことだ！」
「タキさん？　いきなりどうしたよ？」
「…いや、あの、なんでもないです」
驚きのあまり、一瞬素に戻ってしまった…。
私一鳴滝は嵐のようにやって来る注文を捌きながらディケイドが来るのを待っていたのだが…、休憩が終わり、ついに奴が現れることはなかったのである。
しかも、奴のことばかり気にかけていたせいで食器を割ってしまい、その後始末を黙々とやっている最中である。
（ディケイドォォォオオオ！　貴様が食堂に来なかったせいで、私の体はボロボロだ！）
そう叫んでしまいたかったが、怪しまれるといけないのでやめた。
私は仕事を終え、学園の渡り廊下で一人ため息をついた。
「…私は一体何をしてるんだ」
ふと、口からそんな言葉が漏れた。
せっかく作戦を考えたのに失敗してしまった。しかもそのあと食器

まで割ってしまった。

「何だか私、ここ最近失敗してばかりだなぁ」

こうしている間にもディケイドは、またさらなる世界の破壊を招いているかもしれないというのに…。

何だか自分が情けなかった。

そう考えていたときであった。

「そんなにディケイドが怖いか…？」

突然そんな声が聞こえたかと思うと、目の前に一体の怪人が姿を現した。身体にさそり座を宿している。

こいつ、まさか…。

「こ、怖くなどない！　怖くなど―」

「無理しなくてもいい。貴方に力をあげよう。怖いものを追い払うことの出来る力を…」

そうしてその怪人が去った後、気づけば私の右手には、ひとつの黒いスイッチが握られていた。

「星に、願いを……」

「…俺は一体何をしてるんだ」

ふと、口からそんな言葉が漏れた。

午後1時。

幸いにも今日は午後から担当する授業が無かったので、俺一門矢士

は学園中の教室や施設を片っ端から捜してみたのだが、まだ2人は見つかっていなかった。
まだ弁当も食べていない。2人のことは心配だが、時間の経過と空腹からの苛立ちで段々薄れていく。
成り行きでこの学園に来たが、よくよく考えてみれば、この学園と、写真館で見たスクリーンの絵と、何の関係もないじゃないか。
見た限り、この学園は特に何の変哲もない普通の高校である。これと宇宙と、なんの関係があるというのだろうか。
わからない。
全くわからない。
何だかもう、面倒くさくなってきた。
俺はもう、疲れた。

そう思ったときだった。
”立入禁止”とテープが張られている、誰も使っていない小さな部室。
その中にふと見かけた掃除用具入れに、俺は何かの違和感を感じた。
その違和感が何なのかはよくわからない。わからないが、確実に、何か普通じゃない気配のようなものを感じた。
…とりあえず開けてみるか。
そう思い用具入れの扉を引いた瞬間、突然俺は強烈な光に包まれた。

「眩しい……っ！」

しばらくしてようやく目が慣れ、俺は光の先を見据えた。どうやらこの光は、どこかへと繋がっている道のようである。
俺は意を決して光の中に足を踏み出した。
何ともない。
俺はその光の先へと進んでいった。
すると、目の前にまた一枚の扉が姿を現した。これはさっきのよう

に押したり引いたりして開けるものではなく、横開きの自動ドアのようだった。
俺がその扉に近づくと、扉がゆっくりと開いた。

「これは……」

そこには学園の教室よりも広く開放的なスペースが広がっていた。白を基調としたカラーリングのその部屋の中央にあるテーブルには、”友情”と綺麗にレタリングされている文字が書いてある黒いかばんとこの学園指定のかばんが置かれており、そのまわりには、スイッチのようなものが数個散らばっていた。そして、

「君は一体…」
「…誰だ？」

こちらを見て呆然としている2人の男子生徒こそ、俺がさっきから捜していた歌星賢吾と如月弦太朗に違いなかった。

第一話「十・年・共・演」（1）（後書き）

次回、仮面ライダーディケイド―
「俺がこの部の顧問になってやる」

弦太朗達の部活「仮面ライダー部」の顧問になると宣言し、フォーゼと共に戦うことを決意する士。

「この力なら、ディケイドを倒せるかもしれない…！」

一方、さそり座のゾディアーツから渡されたスイッチの誘惑に負けてしまい、どんどん暴走していく鳴滝。
そして士は弦太朗達の目の前で変身、ついに正体を明かす―！

次回、お楽しみに。

第二話「十・年・共・演」（2）（前書き）

これまでの仮面ライダーディケイドは―

「…今日から、このクラスの臨時講師をすることになった、門矢士…です（ニッコリ）」

仮面ライダーディケイドこと門矢士（かどやつかさ）は、新しく来た世界でいきなり高校の教師をする羽目になった。
授業をサボっているという噂のある2人の生徒―歌星賢吾（うたほしけんご）と如月弦太朗（きさらぎげんたろう）を探し回り、学園内の掃除用具入れから繋がっていた部屋で偶然発見する。
そのころ鳴滝（なるたき）は、さそり座の怪人から黒いスイッチを渡されていた―。

第二話「十・年・共・演」（2）

「君は一体…」
「…誰だ？」

しばらくの間、互いに何を話せばいいのかわからず、部屋は沈黙に包まれた。
はっと我に返り、先に沈黙を破ったのは俺一門矢士だった。

「俺は…この学園に新しく来た先生だ」
「先生…。…さっきは”君”と呼んでしまって、すいませんでした」
「お前、名前は？」
「歌星賢吾です」

この礼儀正しい方が歌星賢吾か。となるとこの短ランでリーゼントのいかにも不良みたいなのが…

「俺は如月弦太朗。この学園の全員と友達になる男だ！」
「またそれか。君ってやつは…」

如月弦太朗、だな。

「で、お前ら、ここで何してたんだ」

俺は歌星に聞いた。

「それは…」

歌星は急に言葉に詰まった。

「ていうか、ここどこだよ。なんで外真っ暗なんだよ」

「……」

「言えないのか？」

「あの…これはですね、」

「仮面ライダー部だ！」

はい？

「如月！　余計なことを―」

歌星の制止を聞かず、如月は続けた。

「この学園にはびこる怪物から生徒を守るための部活、それが仮面ライダー部だ！　そしてここは俺達の部室、月面基地ラビットハッチだ！」

月面基地…？　仮面ライダー部…？

マジでか……？

「これが我が仮面ライダー部の旗だ！　ちなみにデザインしたのは俺だ！」

そう言って如月は壁に掛けてある旗を指差した。

『つかむぜ、宇宙！』と書かれている旗の中央にはロケットが描かれていた。大きな複眼と真っ直ぐ伸びた触覚が印象的である。

……あれ？

俺、これどこかで見たことあるような…。

「如月ぃ……君ってやつは、なんで全部話してしまったんだーーーーー！」

「うわーっ！　スマン賢吾、ついうっかり……！」

「君は口が軽すぎるんだ、信じられないくらいになぁあああああああ！」

「俺が悪かったあああああああ！」

歌星がキレた。どうやら、歌星が黙っていたことを如月がばらしてしまったらしい。

にしても、学園を怪物から守るための部活とか、ここは月面基地だとか……にわかに信じがたい。

いや、それ以前に、

「仮面ライダー部、って…」

「おう！　ちょっと見てろ！」

そういって如月が取り出したのは、…なんだこれ。

スイッチの付いたソケットが４つあって、それぞれにさらにスイッチが差し込まれている。向かって左側には、引き倒し式のレバーがある。

如月の腰の所でそれは自動的に装着された。どうやらベルトのようだが…なぜあんなにゴツいデザインなんだ？

「如月、やめろ！　先生の前で…！」

「ここがばれちまったんだ、別にいいだろ！」

「ばらしたのは君だろ！」

歌星の制止を振り切り、如月はソケットの前のスイッチを向かって左側から順に倒し、体の前で左腕を曲げて構え―

3（スリー！）←

2（ツー！）←

1（ワン！）→

「変身！」

右手を掛けていたレバーを引くと同時にその手を天へ高く上げた瞬間、強烈な蒸気と熱風が駆け抜けるように広がった。
あまりに突然だったので俺はみっともなく尻餅を搗いてしまった。

「痛ってぇ……ったく、いきなり何なん―」

何なんだ！
そう言おうとした俺は立ち上がった瞬間驚愕した。
目線の先にいたのは、俺の知っている如月弦太朗ではなかった。

「宇宙、キタ――――――――／（゜∀゜）／――――――――！！」

さっき見た旗に描かれているのと同じ、大きな複眼に真っ直ぐ伸びた触覚―正確にはアンテナか―のロケット頭。宇宙服のような真っ白いスーツ。所々に「○」「×」「△」「□」の幾何学模様のような意匠も見られる。

宇宙飛行士がそこにいた。

「先生、どうだ！　これがこの仮面ライダー部の切り札―」

宇宙飛行士…

ライダー……

……思い出した！

こいつの名前は―

「「仮面ライダーフォーゼ！」」

「…え？」

「あれ？」

「何っ…？」

……ハモった？

手元に残された、一つのスイッチ。

私―鳴滝は何も言わずそれをただじっと見つめていた。

さっきさそり座の怪人から渡された、赤いボタンのスイッチ。

これが、これこそが、ディケイドに知られたくなかった秘密の代物なのだ。

このスイッチを押してしまえば、どんな人間もたちどころに怪人に変身してしまう。

スイッチャーと呼ばれるその人間は力を頼るようになり、やがて意識を抜かれてしまい、人間に戻ることが出来なくなるのだ。

ディケイドがもしこのことを知ったら、そのスイッチの秘密を知ろうとする。そうして奴に干渉されてしまうと、やがてこの世界も破

滅の道を辿ることとなってしまうだろう。
この世界には、この世界の仮面ライダーがいるのだ。
ディケイドは関わらなくてもいい。

しかし…。
どうもさっきからそわそわする。
何故かって？
それは…

スイッチを押してみたくなってしまったのだ。

人間、スイッチを見ると押してみたくなるらしく、特に赤いボタンには反応しやすいのだとテレビで見たことがある。
このスイッチは危険だ。押すとどうなるかわからない。
だが―押したい。押してみたい。
この際結果がどうなるかではなく、ただ純粋に押してみたい。
押したい。押したい押したい押したい押したい押したい押したい！
ええい、ままよ！
一思いに押してしまえ、鳴滝―

そう思ったところで、私の理性が警鐘を鳴らした。
押してはいけない。押したら取り返しが付かなくなってしまう。
危ないところだった。
危うく悪魔の力を使ってしまうところだった。
こんなスイッチ、さっさとどこかへ捨ててしま……はっ、はっ、はっ、

「はーっくしょい！」

カチッ。

小気味良い音が響いた。

「あっ―」

そうして私は怪物になった。

「ここは…仮面ライダーフォーゼの世界…」

やっと俺―門矢士はこの世界のことを思い出した。

「先生、どうしてフォーゼのことを…」

「もう聞かなくてもだいたいわかる。思い出したからな。それより」

「それより、何ですか？」

歌星が聞いた。俺は、高らかに宣言した。

「今日から、俺がこの仮面ライダー部の顧問になる」

「ええっ！　マジかよ！？」

「いきなりどうしてですか！？」

「どうしても、だ。俺はこの部に、そして―」

俺は如月弦太朗―仮面ライダーフォーゼを指差して、

「お前に―フォーゼに興味がある」

「俺に…興味が」

「ああ」

如月が困惑したような仕種を見せる。まあいきなりだから当然か。

「先生…先生は一体、―」
歌星が何か言いかけた瞬間、ハンバーガー型のメカが突然割り込んできた。
「バガミール…！？　ゾディアーツか！」
バガミールと呼ばれたメカを操作しながら歌星がそう言った。
ゾディアーツ…怪物のことだな。
「行くぞ如月！」
「ああ、言われなくても！」
歌星と如月ーフォーゼが部屋を飛び出す。
「先生はここにいてください！」
歌星がそう付け加えた。が、
「俺も行く！」
俺は聞かなかった。

校門付近。
一体の怪物ーゾディアーツが入口の壁を壊しており、辺りは騒然としていた。
「行くぞ、賢吾！」
「ああ。弱点を分析するまで時間を稼いでくれ！」

フォーゼは怪物へと突っ込んだ。怪物はまだこちらに気づいていない。

「あらよっ！」

フォーゼが強烈な蹴りを怪物の腹にお見舞いした。怪物が悲鳴を上げ、ようやくこちらを振り向く。

怪物は、爬虫類特有の鱗で覆われた皮膚を纏い、顔は醜く、長い尻尾を持っていた。また、体にとかげ座を宿している。

「とかげ座の怪物…リザード・ゾディアーツと言ったところか」

「先生…どうしてゾディアーツのことまで」

「言ったろ。思い出したって」

「だからなぜ…」

歌星が首を傾げた。

「くそっ、こいつ、ヌメヌメしてて攻撃が当たらねぇ！」

先制はしたものの、フォーゼは苦戦を強いられていた。怪物の皮膚から粘着質の液体が出ており、攻撃を受け付けないのだ。何度も何度もパンチやキックを繰り出すが、そのうちの数発しか相手に与えることが出来なかった。

「くっそ…、このっ、このっ、！」

やけになったフォーゼがやみくもに拳を繰り出す。拳は宙を切った。

「グオオーッ！」

その隙を突かれた。怪物の尻尾がフォーゼを襲った。尻尾ががっちりとフォーゼを捕らえ、巻き付き、締め上げる。

「くそっ、放せ！　このっ！　このっ！」

両手が使えず、尻尾を引きちぎろうとするも、怪物の力は想像以上に強かった。

「如月、スイッチだ！　スイッチを使え！」
「ダメだ、スイッチまで手が届かねぇ！」
「くそっ、こうなったら…！」

歌星が持っていた鞄を開け、なにやら操作をした。するとまもなく、

『パウアー　ダイザー！』

黄色い巨大なロボットが、どこからともなくやって来た。その高さは建物の二階くらいだろうか。車の状態から変形し、戦闘体制に入っている。

「俺がパワーダイザーで援護する！　開放されたら俺が食い止めてる間にスイッチを使え！」

そう言って歌星はそのロボットに乗り込んだ。ロボット―パワーダイザーが起動し、歌星が操縦桿を引く。パワーダイザーは怪物に向かって右手を振り上げ、勢いよく怪物につかみ掛かった。

ばごっ。

鈍い音がした。
吹っ飛んだのは―
「ぐあああああっ！」
歌星の操縦するパワーダイザーの方だった。
信じられない。どうしたんだ、歌星。怪物と、その身長の二倍以上あるロボット、パワーダイザー。後者の方が圧倒的に有利に見えるのだが。
となると、問題は―歌星だった。
「くっ…はぁ、はぁっ…くそっ」
「賢吾、無理するな！　身体に響くぞ！」
どうやら歌星は体調があまり良くないらしい。
「大丈夫…だ、このくらい…ぐあぁっ！！」
怪物がフォーゼを締めたままの尻尾で、パワーダイザーに鞭打ちを喰らわせた。
「ぐあああっ！」
「がぁあっ…！」
フォーゼと歌星、双方が苦痛に顔を歪めた。歌星の方は、明らかに限界が近づいている。ダイザーが、動かなくなった。
「こ…このままじゃ…俺も賢吾もやられちまう…！」

フォーゼ―如月が悔しげに叫ぶ。その声もだいぶ消耗している。

こうなったら……。

「俺がやるしかねぇか…！」

俺はバックルを取り出し、腰に装着した。変身ベルト、ディケイドライバーである。

「先生……？」

歌星が掠れた声で呟いた。俺はそれを聞きながら、腰のライドブッカーから『ＤＥＣＡＤＥ』のカードを取り出した。

「安心しろ歌星。俺がなんとかしてやる。俺は仮面ライダー部の顧問で、通りすがりの仮面ライダーだ！」

「仮面…ライダー？」

「変身！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ！　ＤＥＣＡＤＥ！』

そう、俺は―

「仮面ライダー、ディケイド！」

第二話「十・年・共・演」（2）（後書き）

次回、仮面ライダーディケイド―

「あのスイッチは何かが違う」

鳴滝の使っているスイッチは、普段ゾディアーツが使うスイッチの改良版、ヘルスイッチだった。

士達仮面ライダー部が対策を講じていると、第二のヘルスイッチ被害者が現れた！

「ディケイド、私が力を貸そう」

そして鳴滝が、士達とついに共闘―！？

次回、お楽しみに。

第三話「十・年・共・演」（3）（前書き）

これまでの仮面ライダーディケイドは―

「宇宙、キタ━━━━＼（゜∀゜）／━━━━！！」

仮面ライダーディケイド―門矢士が出会った如月弦太朗は、アストロスイッチで戦う仮面ライダー、フォーゼであった。

同じ頃、鳴滝はうっかりスイッチを押してしまい、とかげ座のゾディアーツへと変身してしまう。

苦戦するフォーゼを助けるために、士はディケイドへと変身した―！

第三話「十・年・共・演」（3）

「仮面ライダー、ディケイド！」

「ディケイド…ダト！？」

仮面ライダーディケイド－俺、門矢士の登場に、怪物－リザード・ゾディアーツは初めて言葉を発した。

「ディケイド…キサマヲ、タオス！」

怪物はさっきと同じように、仮面ライダーフォーゼ－如月弦太朗を締め上げたままの尻尾を振り回した。

「うおっ！　あぶねぇ！」

「うわあああっ、目が回るー！」

「助けてやるからもう少し我慢しろ！」

右に左に尻尾をよけながら、ディケイドライバーにカードを装填しバックルを回す。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ！　ＳＬＡＳＨ！』

「タオス！　タオス！　タオス！」

怪物が吠え、尻尾が迫る。３秒、２秒、１秒…、

「今だ！」

尻尾が伸びきる—今まさに俺を捕らえんとする一瞬のタイミングで、俺はライドブッカーを振り下ろした。

「グガアアアアアア！」

怪物が悲鳴を上げる。尻尾は怪物から切り離され、フォーゼは酔うやく…もといようやく開放された。

「うっぷ…助かったぜ、先生」

「大丈夫か？　…来るぞ」

「えっ？　—うわぁっ！」

怪物が口から黄色い液体—どう見ても××だが、ここで言うとアレなので敢えて伏せておく—を俺達にむけて吐きだした。どうやら怪物も自分の攻撃で酔ってしまったらしい。

「くそっ！」

俺はフォーゼを引っ張って、液体をギリギリかわした。液体は後ろの壁に命中。

次の瞬間、その壁が勢いよく爆発した。一瞬にして周りに炎が広がり、爆風が突き抜ける。

「どうなってんだ、あいつの××は！」

「ただの××じゃないってことか…これじゃ、近づくことは難しいな」

フォーゼが言った。確かにあれをまともに受けたら心身共にひとたまりもない。

となると、戦術はひとつ。

「…よし、遠くから攻撃だ！」

俺とフォーゼは怪物の左右に分かれた。

「グガッ！　グガガガッ…グゲエエエエェェエエエ！」

怪物は半狂乱しながら、液体を乱れ打った。俺とフォーゼは寸でのところでそれをかわす。俺は液体に注意しながら、

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ！　ＢＬＡＳＴ！』

ライドブッカーをガンモードに切り替え、フォーゼの準備ができるのを待つ。

一方のフォーゼも怪物との距離を置きながら、

『ランチャー　オン！』

『レーダー　オン！』

右足に箱型のランチャーモジュール、左手にレーダーモジュールを装着。レーダーモジュールで怪物に狙いを定めた。

「先生、いつでもいいぜ！」

「よし！　いくぞ！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ！　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！』

『ランチャー　レーダー　リミットブレイク！』

「ディメンションブラスト！」
「ライダー…宇宙ミサイル！」
俺は引き金を引き、フォーゼは右足を強く踏んだ。
カード型のエネルギーを通過し強化された連弾と四方からのミサイルの雨が、一斉に怪物を襲った。
「グワアアアァアアアァァァアアアアァア！！」
断末魔が響き渡る。攻撃に耐えられず、怪物は何度も爆発を起こし倒れた。
「やったか！？」
黒煙が揺らぐ。視界が晴れ、そこに倒れていたのは―
「……鳴滝！」
信じられないことに、怪物の正体は鳴滝だったのだ。
「先生、このオッサンの事知ってるのか？」
「知っているも何も…ある意味長い付き合いだ」
なぜ？
なぜ鳴滝がこのようなことを？
俺は混乱していた。
鳴滝は気を失ったまま動かない。その手には、黒いスイッチが握られていた。
「…如月！　あのスイッチを拾え！」

ここまでずっと黙っていた歌星賢吾が言った。

「おう、まかせろ！」

フォーゼがスイッチを拾おうとしたその時―

「そうはさせん」

突然、別の怪物が現れた。身体にさそり座を宿した、幹部級のゾディアーツだ。

「うげっ、さそり座！」

フォーゼが一瞬たじろぐ。

「こいつは返してもらおう」

「あっ！」

さそり座の怪物は鳴滝の持っていたスイッチを奪い、それからすぐに姿を消した。

気を失った鳴滝を仮面ライダー部の部室―ラビットハッチに運び込むとちょうど終業のチャイムが鳴った。もうそんな時間だったのか。そうしてしばらくすると、部室に数人の生徒が現れた。そのうちの一人は、俺のクラスにいた女子生徒、城島ユウキだった。

「門矢先生…！　ど、どうしてここにいるんですか！？」

「それはこっちの台詞だ。お前も仮面ライダー部なのか？」

「はい！　この部の部員第一号です！」

そう言って無垢な笑顔を見せる城島。

まあ、授業を抜けていた二人を庇っていたくらいだから、彼女もここに来るだろうとは思っていたけどな。

「あなたが臨時講師の門矢先生ですか。はじめまして、私がこの仮面ライダー部の部長、風城美羽です」

そう挨拶してきたのはこの学園のクイーンと名高い女子生徒、風城美羽だ。

この学園にはアメリカのハイスクールよろしくヒエラルキーが存在し、女子生徒と男子生徒のトップに君臨する生徒を、それぞれクイーン・キングと呼ぶ…と、大杉から聞いた。

「てか部長って…俺は歌星が部長だと思っていたんだが」

「先生、俺は仮面ライダー部は認めてないしそんな部もありません」

「そんなことねぇ！　ここは俺の創った仮面ライダー部だ！」

「君が勝手にそう言ってるだけだ！」

「はたしてそうかな？　僕らもこの仮面ライダー部、参加させてもらってるんだけど？（キラーン☆）」

「そうっすよ、水くさいこと言わないでください賢吾先輩！」

続けてクイーンと並び立つキングの大文字隼に、情報屋のＪＫ（ジェイク）。女子高生の略ではない。断じて。

「仮面ライダー部はある！　部長の私が言うんだから間違いないわ！」

「そうそう！　いい加減賢吾くんも認めてくれたらいいのに！」

「君たちは本当にもう…！」

歌星が頭を抱えた。どうやら、歌星だけが部の存在を認めていないらしい。

「…まあいい、門矢先生のことを説明しておかないとな」

それから歌星によって、今に至る説明がなされた。新しいスイッチのテスト中に俺がここへ来たこと、ゾディアーツのこと、今寝かせている鳴滝のこと、そして、

「門矢先生は…仮面ライダーなんだ」

俺が仮面ライダーだということ。

「仮面ライダー…？　都市伝説じゃなかったの？」

「俺もさっきまでそう思っていたさ、ユウキ。でも、先生は確かに仮面ライダーだった。ですよね、先生？」

「ああ。実は俺にはもう一つ通り名があるんだが…」

「どんなのですか？」

「”世界の破壊者”だとさ」

「えぇっ？」

騒然とする部員達に俺は言った。

「まあ、あそこで寝てる鳴滝が勝手に言い触らしてまわってるだけだから、気にしなくていい」

「そ、そうなんですか…」

騒ぎはすぐに収まった。

「さて、門矢先生の紹介が終わったところで本題に入ろう」

全員一斉に歌星の方を向く。

「そこに寝ている鳴滝という男の使っていたスイッチ…あのスイッチは何かが違うんだ」

「何かって？」

「それは私が説明しよう…」

「うわっ、鳴滝ぃ！　急に驚かすな！」

「失礼な」

鳴滝が意識を取り戻し、ソファーから起き上がった。突然すぎてびっくりした…。

「説明していただけるんですか…」

「ああ、私もゾディアーツのことは心得ているつもりだ」

「お願いします。実際にスイッチを使われた貴方が説明した方が、皆にも分かりやすいかもしれません」

おいおいマジかよ…。

「普通、ゾディアーツのスイッチはスイッチャー、つまりスイッチの使用者が自らスイッチをオン・オフにすることができる。しかし私が渡されたスイッチは違う。あれは一度押してしまえば、使用者は意志に関係なく暴走してしまうのだ」

「スイッチ自体に意志がある、ということですか？」

「言い換えるとそうなる。まだ試作段階のそのスイッチを彼等は”ヘル・スイッチ”と呼んだ」

「ヘル・スイッチ…」

「私は、その悪魔の発明を使う気はなかった。しかし、ひょんなこ

とからついうっかり押してしまった…」
「ひょんなことって…何ですか？」
「ちょっとくしゃみが、出そうになってな」
がくっ……。
「……し、仕方ないだろ！　わざとじゃないんだ！」
「確かにそうですけど…」
「オッサン…そんなことで…」
「すまん。本当にすまないと思っている。まさか押してしまうとは思わなかったんだ」
歌星と如月、半ば呆れ顔である。確かに一番被害を被ったのは二人だ。
「……話を変えましょう。鳴滝さん、どうして俺達も知らない情報を知ってるんすか？」
話題を振ったのはジェイク。
「私は仮面ライダーの世界を監視する役目を持っている。それぞれの世界が破滅を呼び合わないように、陰でいろいろと働いているんだ」
「知らんかった…」
「よく聞け、ディケイド。お前が仮面ライダー世界の中枢に干渉してしまうと、世界の調和は著しく失われてしまうのだ。だから私は貴様を重要監視対象として、先回りして行動を監視していた」
「初耳だな」
「私も初めて言ったからな」
「で、それとこれとどういう関係があるんだ？」

「…そっくりなんだよ」
「何が？」
「ディケイドが世界へ及ぼす影響力と、ヘル・スイッチがこの世界へ及ぼす影響力がだ」
「ほう…？」
「ヘル・スイッチは今までのスイッチとはわけが違う。とてつもなく強大な力を秘めたスイッチだ。もしそのスイッチが別の世界に持ち出されてしまったらどうなるか…わかるな？」

「「「……」」」

その場の全員が沈黙した。

「つまり、もしヘル・スイッチが持ち出されてしまえば、ディケイド、お前が犯した過ちと同じようなことを、世界は繰り返すことになるんだ」
「俺の…過ち……まさか！」

「そう、ライダー大戦のようにな」

ライダー大戦。
かつて世界が辿った、破滅へのカウントダウン。
そしてその原因は、俺―ディケイドが”世界の破壊者”として覚醒したことだった。
海東やユウスケ、そして夏みかんのおかげで、俺は”破壊者”から”仮面ライダー”に戻ることが出来たのだった。

「それだけは絶対に避けなければならないと思い、私はヘル・スイッチを破壊するためこの世界に来ることにしたのだ。幸いまだ試作段階で、ヘル・スイッチはこの世界にひとつしか存在していない。

そうして来てみたらディケイド、貴様に先を越されていたというわけだ」
「なるほど……」
「もしヘル・スイッチがスイッチとして完成してしまったら、この世界が、いや、他の世界すべてが危機に晒されてしまう。そこでだ」
「何だ、鳴滝」
「ディケイド、フォーゼ、力を貸してくれ。ヘル・スイッチを破壊するために。私も出来る限りのサポートをする。頼む。この通りだ」
鳴滝が……
土下座をした。
あのプライドの高い鳴滝が。いつも俺に口出ししてくる鳴滝が……
「「……上等だ」」
「またハモった」
歌星がつぶやいた。
「おい海東、勝手に一人で行くなって！」
俺一小野寺ユウスケは、天の川学園に忍び込んでいた。
「何処にいるんだろ、士は」
まあ正確には、士の様子が気になって仕方がない、そう言って飛び出した海東を追いかけて来たんだけれど。

「勝手に学校に入っちゃって本当にいいのか？」
「大丈夫。僕は一流のお宝ハンターさ」
…答えになってない。
「おや、何だろうあれは」
「え？」
海東が指差した先には、黒いスイッチがひとつ、転がっていた。
「どれどれ…これはどんなお宝なんだろう」
そう言って海東はスイッチを眺めはじめた。ったく、しょうがないお宝ハンターだな。
と、その時。
何かが俺の横をすっと通り抜ける、そんな気配がした。
「……！　誰だ！？」
気が付くと、海東が怪人に後ろから捕まれ、身動きが取れなくなっていた。怪人の身体にはさそり座が光っていた。
「仮面ライダーディエンド…海東大樹だな？」
「いきなり何のようだい？　僕はそれどころじゃ―」
そう言って、海東の表情がいきなり凍りついた。
「お前…このスイッチは、まさか……！」
「その、まさかだ」

「やめろ！　そんなことしたら、僕は…！」
怪人は海東にの親指をスイッチのボタンに這わせた。
「星に、願いを―」
かちっ。スイッチが押された。
「海東！？　―うわっ！」
ものすごい衝撃波に、たまらず俺は吹っ飛ばされた。
「っててて……大丈夫か、海東―」
俺は目を見張った。信じられなかった。
ディエンドの様な姿の悪魔が、そこにいた。

第三話「十・年・共・演」（3）（後書き）

次回、仮面ライダーディケイド―

「海東、目を覚ませ！」

ゾディアーツ化してしまったディエンドと戦うディケイドとクウガ、そしてフォーゼ。しかしヘル・スイッチの驚異のパワーにより、窮地に追い込まれてしまう。そのピンチを救ったのは―！？

そして、ラストワン―ヘル・スイッチ最後のスイッチャーは誰なのか！？

次回、お楽しみに。

第四話「十・年・共・演」（４）（前書き）

これまでの仮面ライダーディケイドは―

恐怖のヘル・スイッチを殲滅するため、鳴滝と手を組んだ仮面ライダーディケイド一門矢士と仮面ライダー部。
ヘル・スイッチの対策を立てているその頃、学園に忍び込んだ仮面ライダーディエンドこと海東大樹は、ヘル・スイッチによってゾディアーツへと変身してしまった…！

※お手数ですが、本編を読まれる前に「活動報告」の記事『四話、ギリギリ』をご一読ください。

第四話「十・年・共・演」（4）

「おい…海東？」

さっきまで海東大樹だった目の前の怪物が、

「ウオオオオオオオオッ！！」

天に向かって吠えるそれは、まさに悍ましい姿だった。
仮面ライダーディエンドに似ているが、普段は鮮やかなシアンが黒み掛かっており、粘膜が妖しく太陽を反射している。両手両足は獣のように変化し、禍禍しい尻尾が生え、そして体にはとかげ座が煌々と光を放っている。その体に秘めた力の強さを表しているかのように、周りには紫色の火花が散っていた。

「ツカサ…ツカサアアアアアアア！！」

怪物と化した海東は士の名前を叫びながら、校舎のある方へと駆け始めた。
まずい、このままでは士だけじゃなく、この学園全体が危ない！

「待て、海東！」

俺はすぐに海東を追いかけた。いつの間にか、さそり座の怪人は見当たらなかった。

「変身ッ！」

俺ー小野寺ユウスケは、仮面ライダークウガに変身し、

「超変身ッッ！」

青龍の戦士、ドラゴンフォームへと姿を変え、超スピードで海東を追いつめる。
謎のスイッチを押した海東が、怪物になってしまった。
にわかに信じられないが、目の前でそれが起こったのだ。動揺していないといえば大嘘になる。
それに出来ることなら海東とは、仲間とは戦いたくない。もう誰も大切な人を失いたくない。失っちゃいけないんだ。
でも、俺はクウガだ。ここにいる大勢の人達のために戦わなければいけない。みんなの笑顔を守りたい。
だから、

「俺は、士、そしてみんなを守るために戦う！　海東、もとのお前も絶対に取り戻す！」

「現在フォーゼの使用出来るアストロスイッチは全部で２０個ある。そのうち１０番のエレキと２０番のファイヤーはステイツチェンジの能力を持っている」

仮面ライダー部の部室、ラビットハッチにて、俺ー門矢士と仮面ライダー部の部員達（如月弦太朗、城島ユウキ、風城美羽、ジェイク、大文字隼。歌星賢吾は…どうなんだろう）、そして鳴滝は、ヘル・スイッチを殲滅するための作戦を練っていた。
俺と歌星、如月、鳴滝はどのスイッチを使用するかについて話し合っていた。俺はフォーゼのアストロスイッチについてだいたいしか覚えてなかったので、歌星にそれぞれのスイッチの用途を教えても

らっていた。

「―これで全部のスイッチの説明は以上です」
「ああ。だいたいわかった」
「…ホントに大丈夫ですか」
「ごめんちゃんと思い出した」

歌星には冗談が通じない。

「ヘル・スイッチのゾディアーツの特徴は皮膚の粘膜と口から吐く××…もとい、火炎弾。動きも速いから厄介だ。となると…」
「さっきみたいに遠くから攻撃すればいいんじゃ…？」
「如月、確かに君の言う通りだが、相手の出現する場所によってはランチャーは使えないだろう」
「あー…だったら近づいて攻撃するいい方法はないのか？」
「近距離戦ならスピードを上げるモジュールと粘膜の影響を受けずに相手にダメージを与えるモジュールの両方が必要だ」
「ロケットは必須だな…あとはなるべく相手に触れるだけで攻撃できる武器があれば」
「オッサン、それならエレキ使おうぜ！　ビリーザロッドならちょっと触っただけでビリビリさせられる！」
「俺も君のアイデアに賛成だ」
「だな」
「うむ」

俺達がスイッチの話をしている一方で、ユウキやジェイク達は先程の戦闘の映像を何度も見返して、相手の弱点を分析してくれていた。

『ディケイド…キサマヲ、タオス！』
「ここで止めてください」

ジェイクの指示で、ビデオを操作している城島が一時停止のボタンを押した。

「何かわかったの？」

風城が聞くと、ジェイクは首を傾げながら、

「このゾディアーツ、鳴滝さんは意識を乗っ取られてるはずなのに、”ディケイド”門矢先生を呼んでんですよ」

「つまり、完全に意識が失われているわけじゃないのね？」

「おそらくは、ですけどね。まあこのスイッチがまだ試作段階なら、初期不良もありえるでしょ」

そういえば、そうだったな。さすが情報屋のジェイク、観察眼が鋭い。

「どっちにしろゾディアーツはゾディアーツだ。俺がダイザーで食い止めてみせる！」

「大文字先輩、すっかり仮面ライダー部の一員ですね！」

「フフッ、まあね（キラーン☆）」

城島に褒められて満更でもない顔の大文字。なるほど、普段は体格の良い大文字がパワーダイザーを操縦していたのか。それなら歌星が苦戦したのも納得がいくな…と、その時。

「ゾディアーツだ！　ヘル・スイッチのとかげ座！」

なんだと！？　もう次のスイッチャーが見つかったのか！？

「モニターオン！」
城島がモニターを切り替え、偵察のバガミールからの映像が中継され映し出される。そこでは―
「ユウスケ……海東！？」
青いクウガに変身したユウスケと、ディエンドそっくりの怪物に成り果てた海東が死斗を繰り広げていた。
クウガ―俺、小野寺ユウスケは苦戦、というか一方的にやられていた。
どごっ。
「うげっ……！」
どかっ。
「ぐっ……！」
ごすっ。
「がはぁっ……！！」
強い。
強すぎた。
海東が俺を目掛けて左の拳を繰り出す。

ばごっ。

「ぐふぅっ……！！」

もう何度目かわからない。
もはや動きに反応出来なくなっていた。
身体が、いうことを聞かない。

あのあと、俺は海東に追いつき、渾身のストレートを右頬に叩き込んだ。

「グアッ！！」

駿足の威力も手伝って、海東は2メートル強吹っ飛ばされ転げ落ちた。まではよかった。
海東の逆鱗に触れてしまったのだ。

「ウガアアアアアア！！」

海東は俺に向かって雄叫びを上げながら、猛スピードで迫ってきた。

「うわっ、あぶな―」

全部言い終わるまでに、俺の体は宙を舞っていた。装甲がぎしりと軋んだ。

どしゃっ。

地面にたたき付けられた俺の上に馬乗りになり、海東は猛烈な拳の応酬を俺に浴びせ続けた。

装甲はあちこちが凹み、クラッシャーからは血が噴き出していた。
海東は立ち上がると今度は既にぼろぼろの装甲をぐりぐりと踏み付けた。鮮血がまた、口の中に広がった。
海東が吠える。

「グオオオオオ！」

俺は…。

「グオオオオオオオオオオ！」

俺は。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

俺は！

「俺はまだ、死ねないんだ！！」

死ぬわけには、いかないんだ！！

俺は力を振り絞り、両足を海東の足に引っ掛けそのまま締め上げた。

「グガ…グガアアアアア！！」

突然のことに驚いた海東が拳を闇雲に繰り出した。が、

「もう俺にそのパンチは効かないぞ！」

タイタンフォームに超変身し鋼の装甲を手に入れた俺にはもう、そ

んなものは通用しない！

「はぁっ！」

俺は隙だらけの海東の腹に拳を叩き込んだ。海東は１０メートルほど吹っ飛ばされ木の幹激突し、崩れ落ちた。

「さあ、ここから反撃だ！」

「ユウスケ！」

「士…遅いよ！　遅すぎるよ！」

クウガ－ユウスケがこっちを振り向き、おどけた風に言った。…が、

「よく頑張ってくれたな」

全てを見ていた俺は、静かにユウスケの肩を叩いた。

「士……」

「ここからは俺達も加勢する。味方も連れて来た」

「味方？」

「俺の部活の部員だ」

「…えっ？」

「俺は如月弦太朗。この学園の全員と友達になる男だ！」

「えぇっ？」

「またやった……」

歌星がやれやれといった表情で額に手を当てた。

「そして、仮面ライダーフォーゼだ」
「仮面ライダー…フォーゼ？」
「彼はこの世界の仮面ライダーだ。この学園にいたんだ」
「鳴滝さんまで…！　もう、何がなんだかさっぱりわかんない！」
「ったく、そういうのは後で説明するから。海東をもとに戻すのが先だ」
「そうそうあの怪物海東が変身してｔ」
「「わかってる！」」

ユウスケが（´・ω・）こんな表情でしゅんとしたが今はそれどころじゃない。

「いくぞ、弦太朗！」
「おう…って先生今、俺のこと名前で…！」
「早く！」
「うっし！」

３（スリー！）←
２（ツー！）←
１（ワン！）→
「「変身！」」
『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ！　ＤＥＣＡＤＥ！』
俺と弦太朗はそれぞれディケイド、フォーゼへと変身した。
「いくぞ！」

「ああ！」
「宇宙、キタ━━━━━＼（ﾟ∀ﾟ）／━━━━━！！」
「弦太朗、前！」
「ガアアアアアアアアアッ！」

起き上がった海東が俺達に向かって迫る。

「ロケットは使うまでもないな…弦太朗、エレキだ！」
「わかってるって！」

フォーゼドライバーのロケットスイッチをエレキスイッチに差し替え、フォーゼはスイッチを入れた。

『エ・レ・キ　オン！』

フォーゼの身体が電流に包まれ、黄色い戦士へと姿を変えた。

「っしゃあ、気張っていくぜ！」

エレキステイツ専用武器「ビリーザロッド」のソケットにプラグを差し込み、

「はっ！　はっ！」

フェンシングの要領で海東の体を突いた。

ビリビリッ！

「ッグガガガガガガガg」

ビリビリビリッ！

「アガガガガガガガガッ！！」

粘膜が張っているためか、水面を伝わるかのように身体全体に電流が走る。堪らず海東は痙攣した。

狙い通りだ。

「よし、弦太朗！　そのまま痺れさせておけ！」

俺はファイナルアタックライドのカードを取り出した。

「ユウスケ、いくぞ！」

「ああ！」

ユウスケもタイタンソードを手にし、とどめを刺そうとした。

が、しかし。

「うああっ！」

「どうした、弦太朗！」

「コイツ銃持ってるぞ！　あっぶねぇ！」

しまった、そうだった…！

海東はディエンドライバーを携帯していたのか…当然っちゃ当然だが、なんて厄介な…！

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ！　ＢＬＡＳＴ！』

くぐもった電子音声とともに、砲弾の雨が俺達を襲った。

「うわっ！」
「ぐはっ！」
「だああっ！」
弾はことごとく命中し、俺達はその場に倒れ伏せた。
「あいつ、射撃の腕はそのまんまかよ…！」
「グギャギャ…ツカサァ……」
海東が俺の名前を呼ぶ。
何か手立ては無いのか……？
思わぬディエンドの反撃に、ディケイド達は再び不利な状況に立たされていた。
私一鳴滝は必死に知恵を巡らせていた。
「どうにかディエンドを止める方法は無いのか…？」
「ある」
「ひえっ！？」
思わず声を上げたその先には、目の下に黒いメイクを施し、手には今流行りの…何だっけ、タブレット端末を携えた少女が立っていた。
「今…なんて言ったのかね？」
「弦太朗さんに、これを」
私の聞いたことをさらりと無視して、彼女は後ろに置いていた発砲スチロールの箱を私に差し出した。

「これは何だ…？」
「これがあれば、あの怪物を倒せる」
「……君は何者だ？」
「野座間友子。…仮面ライダー部」

そう言って野座間と名乗った少女は姿を消した。彼女も、仮面ライダー部なのか…さっき部室にあんな子いたっけ？
ってそうじゃなくて。
これがあれば本当にこの状況を打破できるというのか……？
ええい、保証はないがやってみるしかない！

「ディケイド！」
「何だ、鳴滝？　今忙しい」
「これをフォーゼに渡せ！　それっ！」

私はディケイドに向かって発砲スチロールを投げた。

「…何だ、これ？」

俺一門矢士は、鳴滝から発砲スチロールを受けとった。…何やら結構重たいぞ、これ。

「おい、弦太朗。鳴滝からだ」
「ああ？　…何だこれ？」
「開けてみろ」

フォーゼは言われたとおりに箱を開けた。するとそこには―

「…ナ、ナマコオオオオオオオオオオオオオオ！！」

海東、絶叫。
発砲にはこれでもかというほどのナマコが敷き詰められていたのだ。
そういえば海東、ナマコ苦手だったなあ……。

「弦太朗、ナマコをあいつに向かって投げろ！」
「なんだかよくわかんないけど了解！　それっ！　それっ！」
「ギャアアアアアアナマコオオオオオオオオナマコオオオオオオオオオオオオ！！」

海東の額に、身体に、ナマコが次々と襲い掛かる。海東は奇声を上げながらナマコを振り払おうと一生懸命だ。

さらにそこに、

『パゥアー　ダイザー！』

「お待たせ！（キラーン☆）」

大文字のパワーダイザーまでもが駆け付けた。

「大文字！　そいつ抑えろ！」
「了解です！」

大文字はすかさずパワーダイザーで海東を拘束し、身動きを封じた。

「グガッ、グガッ！」

さすがの海東でもパワーダイザーのパワーには勝てないようだ。

「よし、今だ！」
「おう！」
「いくぜ！」
『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ！　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ！』
『エ・レ・キ　リミットブレイク！』
俺とフォーゼの必殺待機音が鳴り響く。
「はあああああああああっ……」
ユウスケがタイタンソードに力を込める。
「ライダー１００億ボルトブレイク！」
「タイタンカラミティ！」
ユウスケと弦太朗が同時に海東に切り付け、そして、
「ディメンションキック！」
俺がとどめの一撃を蹴り込んだ。
「グガアアアアツカサアアアアアアアアアアア！！」
海東は俺の名前を叫びながら爆発、鳴滝と同じようにもとの姿へと戻った。
「海東！」

「う…うーん……あれ、士？」

寝ぼけているような表情で、海東はすぐに目を覚ました。

「如月！　スイッチが！」

「え？　…うああ！」

歌星のその声でフォーゼ一弦太朗が驚きの声を上げた。俺も慌てて
そっちを向く。

ヘル・スイッチは弧を描くように宙を舞い、そして―

すぽっ、かちっ。

「？」

俺もよく知る先輩、大杉の手の中に収まり、再び起動した。

『ラストワン』

第四話「十・年・共・演」（４）（後書き）

次回、仮面ライダーディケイド―

「如月ぃ！　日ごろのストレス、全部全部お前のせいだあああああ！」

ラストワンの力で暴走する大杉。それを止めようとする仮面ライダー達。

「フォーゼ、ちょっとくすぐったいぞ！」

そしてついにフォーゼの力が明らかに！

次回、お楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2734y/

仮面ライダーディケイド -a variaty world- 第二章 「十・年・共・演」

2011年11月17日16時50分発行